様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３１３０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０４７７３

研究課題名（和文）ルーラルワークプレイスの基礎的研究―その近現代史と活用保全の要件

研究課題名（英文）Basic Research on Rural Workplaces; There Modern History and Utilization Conservation Requirements

研究代表者
大沼　正寛（Onuma, Masahiro）

東北工業大学・ライフデザイン学部・教授

研究者番号：４０３１６４５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：地域の資源・環境をもとに価値を生み出す技術を「地技」と呼び、これを支えるルーラルワークプレイス（生業場）の近現代史を明らかにし、今後の活用保全のための要件を考察することを目的とした。宮城県・東北地方における食・衣・住などに関わる建築遺産群を中心に、空間情報および近現代史の比較考察を行った。総じて、伝統的に映る業種であっても生産・輸送などの面で大きな変容を経てきた一方、地場ごとの多様性と相互連関性が折り重なって現状に至っており、従前の環境を尊重する継承的な点、新たな価値創出に挑む創造的な点を併有していることが把握された。また近年は、従来の領域を超えた共創的な動きもみられることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
農山漁村の生活・生業様態を把握する際には、面的な広がりや統計資料からマクロに把握する、一定のモデルをもとに把握する、特徴ある文化遺産から把握するなどの方法があり、建築学においてはそれぞれ都市計画、建築計画、建築史学の各分野がこれを担ってきた。それぞれ不可欠であるが、それでも捨象されやすい対象がある。生活と生業が区分しにくい事例、伝統性と近代性が混在した事例、地味で動態的な事例などである。本研究は、津々浦々に在る（在った）農山漁村の生業場に光を当て、個別性・多様性と共通性・連関性に鑑みながら、空間（非文字）資料の蓄積にも寄与し、今後の活用保全にも考察を寄せた点に、学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Rural workplaces for "local technologies" that create value based on local resources and environment, clarification of their modern history of rural workplaces and consideration requirements for future utilization and conservation, are purposes of this study. Focusing on architectural heritage groups related to food, products, and housing in Miyagi Prefecture and the Tohoku region, we conducted a comparative study of spatial information and modern history. In general, even industries that appear to be traditional have undergone major changes in terms of production and transportation.
It was understood that there is a creative point that challenges the creation of new value. In recent years, we have also found that co-creative movements that transcend conventional domains can be seen.

研究分野：建築計画および都市計画関連

キーワード：ルーラルワークプレイス　生業景　地技　農山漁村　近現代史　活用保全　継承　共創

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 衰退する農山漁村のルーラルワークプレイス（生業場）

我が国の農山漁村では、地域に根ざした元来の生業に加え、近代産業が隆盛した時期もあったが、現在は衰退し、人口流出が進んでいる。この間、各地のルーラルワークプレイス（主として１次・２次産業に供する生業場）を構成する建築遺産群も数多く失われてきた。それらは造形意匠の価値だけでなく、今後の持続可能性に示唆を与えるものも少なくない。各地に未だ散在するルーラルワークプレイスの現状や歴史、活用保全の可能性を探る必要がある。

(2) 東日本大震災からの復興をめざす東北地方の課題

上記課題は東北地方にも通底し、とくに東日本大震災の前後に露呈した。将来維持が不可能なほどの巨大な都市基盤が農山漁村に投入され、その復興バブル経済にすがる昭和近代型の復興事業が展開された。この状況は、そもそも地域に根ざした生業を正当に評価してこなかったこと、地域自身も主体的に目標を描くことができずに来たことと、密接に関わっている。

(3) 超克・持続の端緒を示唆する生業場の共創

地域は確かに衰退しているが、今後の高度ネットワーク社会においては、より自立・自律的な地域経営、都市との相補的な関係が模索されるべきであろう。昨今は、旧来の生業を継続するだけでなく、新たな価値共創を構築する先駆例もみられる。散在するルーラルワークプレイスの近現代史を明らかにし、活用保全の要件とは何かを考究すべき好機にあると捉えられる。

２．研究の目的

本研究では、都市経済の影響をつよく受けながらも、これに対置されてきたルーラルエリア（農山漁村・田園地域）が広がる東北地方の農山漁村や田園地域、産業町などを主要な調査対象として、ルーラルワークプレイス（生業場）の近現代史を事例的・類型的に解明・記述することを第一の目的とする。また、そうしたルーラルワークプレイスの多くが転生の時期を迎えている実情に鑑みて、その活用保全を成立させるための要件を考察することを第二の目的とする。

３．研究の方法

(1) 語義・基礎概念の整理：　ルーラルワークプレイス（生業場）をめぐる語義や基礎概念を整理し、東北地方の建築歴史地理に関わる領域論や時代区分を考察して、以降の基盤とする。

(2) 先行研究・関連研究などの概観：　対象とすべきルーラルワークプレイスの事例候補は広範にわたる。建築史学・農村計画学などの先行研究、産業経済分野の関連研究、文化的景観・伝統的工芸品・近代化産業遺産などを概観し、調査対象を見極める。なお、国外調査も当初計画していたが Covid-19 により変更し、宮城県内の事例を増やして同等の成果に至るよう努力した。

(3) 予備調査からの対象抽出：　予備調査に位置づけられる「農山漁村共同アトリエ群による産業の再構築と多彩な生活景の醸成（2016-19）」を進めるなかで得た事例情報・人脈をもとにこれを精査し、対象の抽出と調査計画・実施を進める。

(4) 生業場の空間実測と近現代史：　抽出事例の生業場を訪れ、空間構成を実測調査する。実測は建築史学・文化財調査の方法を参照しつつ、平面や構成部材の詳述よりは、立地・配置や生業工程が記入容易な図的表現を心がける。また、近現代史の聞き取り調査を併行し、生業場において何を資源とし、目指し、どんな価値を創出してきたのか、それらの解明につとめる。

(5) 生業場の活用保全の要件に関する考察：　現役の生業場を中心に、生業の継続にあたっての当事者の自己評価について尋ねる。理想と現実、可能性と課題を傾聴し、地域景観を特徴づけているルーラルワークプレイスの持続可能性について考察し、まとめとする。

４．研究成果

(1) 語義・基礎概念の整理：　地域の資源・環境をもとに価値を生み出す技術を「地技」と定義し、事例の評価・選別に資することとした。また、近現代を近世末期から 10 年程度の間隔で区分し、重厚長大に発達する近代史とは別に、地技型生業の形成史を概括する方針をたてた。

(2) 先行研究・関連研究などの概観：　「近代遺跡調査–農林水産業–」[1] には、計 548 件の農業・牧畜などの近代遺跡がリストされ、選定された 52 件の詳細調査事例が編まれている。うち東北 6 県に存するのは 8 件に留まり、宮城県の例は無い。一方、本研究の趣旨に照らせば、衣食住を意識した「日本産業技術史事典」[2] のような再分類も一考に値する。そこで、20 種の一般的産業分類を、Ⅰ-食・Ⅱ-衣・Ⅲ-住・Ⅳ-交通・Ⅴ-エネなど計 10 種の「再分類 1」に再編した。次に、地技型生業に関わりの深いⅠ～Ⅴ種を中心に「再々分類 2」を設け、ア-農業・イ-漁業・ウ-養育畜・エ-食品加工・オ-製造（地場）・カ-素材（林業含む）・キ-建築造園土木・ク-観光運輸・ケ-エネ鉱業に区分し、コ-その他 を含め計 10 類を設け、調査事例を位置づける基盤とした（表 1）。

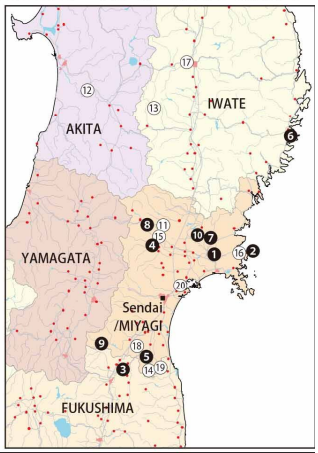
(3) 予備調査からの対象抽出：　上記の再々分類 2 を念頭に、空間調査を行う代表事例 10 件（❶～❿）と、比較考察のための実地視察を行う 10 件（⑪～⑳）を抽出した（表 1）。

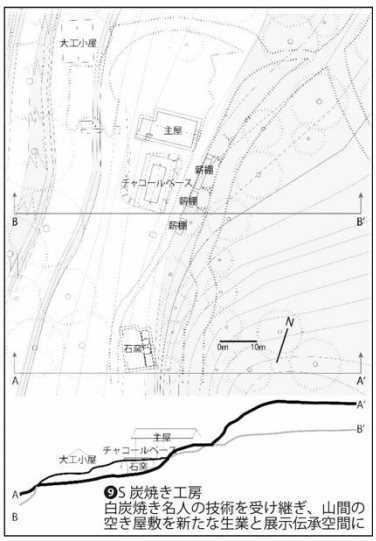
(4) 生業場の空間実測と近現代史：　事例❶～❿および⑪～⑳の生業場を視察し、文献調査や聞き取りを進め、前者については空間実測を行った。また、その形成過程を聞き取り、複眼的な年

表に併記することで、相互の比較や関係性を考察できるようにした（図 1～3、表 2）。
(5) 生業場の活用保全の要件に関する考察：　事例❶は、先祖伝来の土地を継承するために複合経営を展開する例、❸は、基本的な生業を永く維持し、増改築の痕跡が良く保存されている例、❾は、旧村がダム湖に水没し、生業の継承・進化を求めて立地を選んだ例である。このように、生業場は十類十色というべき多様性をみせ、しかも❸を含めた養蚕の活況が❾の生業発展と連動していたという関係性も把握することができた。なお、地道な地技型生業に対する社会の評価が必ずしも十分でない課題は共通しており、❾のように生業場そのものを消費者に開いていく努力（体験施設の増築）も、生業場の進化・変容過程の一つとみることができる。活用保全の要件としては、土地または生業のいずれを優先するのか、新たな利活用ニーズがあるか、といった方針策定が第一であり、遺された資産の評価・活用がこれに続く、と総括できる。

表 1 地域性に着眼した産業再分類と研究対象の抽出　＊再分類 1 のうち、地場産業に関わりの深い 10 類を列記したもの

再分類 1（産業大分類を 20→10 に再編）	再々分類 2＊	本研究で主対象とした 10 事例（❶～❿）および副対象とした 10 事例（⑪～⑳, 右図は所在位置）	
Ⅰ 食（A1 農・B 水産・加工・M1 飲食サ）	ア - 農業	❶H 農家	⑪Y 農場 ⑫T 農場（秋田） ⑬N 農場（岩手）
	イ - 漁業	❷K 漁家	
	ウ - 養・育・畜	❸T 蚕種製造（福島）	⑭M 養蚕家
	エ - 食品加工	❹K 醸造蔵	⑮K 凍み豆腐店
Ⅱ 衣（E1 繊維・工芸・一般製品ほか）	オ - 製造（地場）	❺F 和紙工房 ❻I 鉄工所（岩手）	⑯O 硯生産販売協同組合 ⑰T 鋳物工房（岩手）
Ⅲ 住（A2 林・E1 材・D 環境建設・C 鉱業）	カ - 素材産業		⑱Y 石材　⑲K 林業
	キ - 建築造園土木	❼S 石盤工房	⑳Y 石材・工務店
Ⅳ 交（H 運輸交通・M1 観光宿泊ほか）	ク - 観光運輸	❽O 湯治旅館	
Ⅴ エ（F 電気水道ガス・エネルギー）	ケ - エネ・鉱業	❾S 炭焼き工房	
Ⅵ 機（E2 機械・G 情報通信・現代製品） Ⅶ 販（I 販売・卸・小売ほか） Ⅷ 金（J 金融保険・K 不動産・賃貸ほか） Ⅸ 医（P 医療・福祉・M2 生活・N サービス） Ⅹ 公（L 学術技術・O 教育・S 公務） 他（QRT その他分類不能なもの）	コ - その他	❿K 寺院	※特記なき事例は全て宮城県に立地





作図協力＝Research Assistant：林弘樹氏／山地ひとみ氏

表 2 代表 3 事例の近現代概略年表

	❶H農家の生業場	❸T蚕種製造所の生業場	❾S炭焼き工房の生業場
1860s	近世からの旧家、長屋門あり	この約100年前に当地で創業 '77 伊達の蚕種・繭・生糸受賞多数	七ヶ宿：夏は農業、冬は炭焼き
1890s		'98=M31 主屋改築（相馬から移築） '00s 西ノ蔵、東ノ蔵の創建	'80s 福島から白炭焼き伝来 蚕種本場福島から白炭の需要
1920s		'10s 蚕種保護室、氷室の創建 '30=S5 原種製造蚕室 創建	'10s 名人・故 佐藤石太郎 生誕
1950s	屋根をスレートに、沼を田に 長屋門撤去、岩蔵を増築	'42=S17 普通製造蚕室 移築再建 '50s 洗流し場創建、フロン冷蔵	中山間から都市へ出稼ぎが急増 七ヶ宿ダム計画、集落移転へ
1980s	牛舎を増築して畜産を導入 家屋部分も増築	'98 蚕糸業法 廃止	ダムが竣工、石太郎も移転 S氏が石太郎に弟子入り
2010s	'00s 福祉系製造業を起業 畜産やや縮小、複合経営継続	'12 伊達市養蚕用具 国登録に	'10s 白炭の製造販売を起業 '21 体験施設増築、くらしの提案へ

図 1 左：複合農家の例
図 2 中：蚕種製造所の例
図 3 右：製炭工房の例

5．まとめ

現存するルーラルワークプレイスの近現代史を総括すると、それらは変容に満ちている。伝統的とされる業種でさえ、生産手段や輸送交通等の近代化を利用して発展してきた面も少なくない。現業を維持できるあいだは良いが、災害を含めて状況が変わる場合、土地と生業のいずれを重視するのか、新たな価値は何かといったコンフリクトは多い。しかし生業そのものが完全なる新規入植でない限り、従前の環境・資源・技術を尊重する Successive（継承的）な点が保持されることは少なくなく、都度、新たな価値創出に挑む Creative（創造的）な点をも併有していることが分かった。他方、人口動態が激変する今後は、Collaborative（共創的）な点が求められ、そのような各地域の胎動も近年は散見されることが把握された。

〈参考文献〉

1) 文化庁文化財第二課 編「近代遺跡調査−農林水産業−」2021 年 3 月
2) 日本産業技術史学会 編「日本産業技術史事典」2007 年 7 月　ほか

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 大沼正寛	４．巻 -
２．論文標題 生業景の動態的存続と地場の造形に関する事例的考察	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本建築学会大会（近畿）学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田陽菜子・大沼正寛	４．巻 -
２．論文標題 凍み大根の生業景と干し場の比較考察	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本建築学会大会（近畿）学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 2023
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 矢﨑茉梨・大沼正寛	４．巻 -
２．論文標題 港町塩竈における石造建造物と地形がおりなすまちなみ景観	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本建築学会大会（近畿）学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大沼正寛	４．巻 -
２．論文標題 福島県伊達市T蚕種製造所の建造物群と生業景	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本建築学会大会（北海道）学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 97-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 黒井唯花・大沼正寛	4．巻 -
2．論文標題 宮城県加美町工藝藍學舎・醸造蔵の変容プロセス	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本建築学会東北支部研究報告集（計画系）	6．最初と最後の頁 69-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林弘樹・大沼正寛	4．巻 -
2．論文標題 宮城県刈田郡七ヶ宿町における白炭焼きの技術継承と現代職人の工房空間	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本建築学会大会（東海）学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 59-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 阿部正・大沼正寛	4．巻 -
2．論文標題 とよま玄昌石の館所蔵の資料調査とその特徴について	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本建築学会大会（東海）学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 39-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 阿部正・大沼正寛	4．巻 -
2．論文標題 南三陸町入谷における天然スレート民家の屋根替えに関する考察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 107-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林弘樹・阿部正・大沼正寛	4．巻 -
2．論文標題 天然スレート葺き職人の工具と工房 ―ルーラルワークプレイスの事例研究・その1	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 85-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤優作・大沼正寛・阿部正	4．巻 -
2．論文標題 宮城県大崎市東鳴子・川渡温泉の再生のための基礎的考察　旅館0と湯治文化の変容に着目して	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集	6．最初と最後の頁 83-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 大沼正寛
2．発表標題 生業景の動態的存続と地場の造形に関する事例的考察
3．学会等名 日本建築学会大会（近畿）学術講演
4．発表年 2023年

1．発表者名 吉田陽菜子・大沼正寛
2．発表標題 凍み大根の生業景と干し場の比較考察
3．学会等名 日本建築学会大会（近畿）学術講演
4．発表年 2023年

１．発表者名 矢﨑茉梨・大沼正寛
２．発表標題 港町塩竈における石造建造物と地形がおりなすまちなみ景観
３．学会等名 日本建築学会大会（近畿）学術講演
４．発表年 2023年

１．発表者名 大沼正寛
２．発表標題 福島県伊達市T蚕種製造所の建造物群と生業景
３．学会等名 日本建築学会大会（北海道）学術講演
４．発表年 2022年

１．発表者名 黒井 唯花，大沼 正寛
２．発表標題 宮城県加美町工藝藍學舎・醸造蔵の変容プロセス
３．学会等名 日本建築学会東北支部研究報告会
４．発表年 2022年

１．発表者名 林弘樹・大沼正寛
２．発表標題 宮城県刈田郡七ヶ宿町における白炭焼きの技術継承と現代職人の工房空間
３．学会等名 日本建築学会大会（東海）学術講演
４．発表年 2021年

１．発表者名 阿部正・大沼正寛
２．発表標題 とよま玄昌石の館所蔵の資料調査とその特徴について
３．学会等名 日本建築学会大会（東海）学術講演
４．発表年 2021年

１．発表者名 阿部正・大沼正寛
２．発表標題 南三陸町入谷における天然スレート民家の屋根替えに関する考察
３．学会等名 日本建築学会大会（関東）学術講演
４．発表年 2020年

１．発表者名 林弘樹・阿部正・大沼正寛
２．発表標題 天然スレート葺き職人の工具と工房 ―ルーラルワークプレイスの事例研究・その1
３．学会等名 日本建築学会大会（関東）学術講演
４．発表年 2020年

１．発表者名 佐藤優作・大沼正寛・阿部正
２．発表標題 宮城県大崎市東鳴子・川渡温泉の再生のための基礎的考察　旅館0と湯治文化の変容に着目して
３．学会等名 日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

生業景デザイン研究所 https://ru-cas.jp

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関